

さいたま市教組新聞

さいたま市
教職員組合
TEL 641-6763
FAX 648-3567
e-mail saitama@kyouiku-net.org
URL http://www2.plala.or.jp/saitama-sikyouso/
2007.8.9(木)
No.125

ヒロシマ ナガサキを忘れない

平和への誓い

私たちは、六十二年前の八月六日、ヒロシマで起きたことを忘れません。あの日、街は真っ赤な火の海となり、何もかもが焼かれてなくなりました。川は死者で埋まり、生き残った人たちは涙も出ないほど、心と体をきずつけられました。あの日、ヒロシマは、怒りや悲しみのもとでも恐ろしい街でした。これが原子爆弾です。これが戦争です。これが本当にあったことなのです。

しかし、原子爆弾によっても失われなかったものがあります。それは生きる希望です。祖父母たちは、廃墟の中、心と体がぼろぼろになっても、どんなに苦しくつらい時でも、生きる希望を持ち続けました。焼け野原になった街をつくり直してきました。そして、今、広島は、自然も豊かでたくさんの人々が行き交う、笑顔あふれるとても平和な街となりました。

平和な世界をつくるためには、「憎しみ」や「悲しみ」の連鎖を、自分のところで断ち切る強さと優しさがが必要です。文化や歴史の違いを超えて、お互いを認め合い、相手の気持ちや考えを「知ること」が大切です。

途切れそうな命を必死でつないできた祖父母たちがいたから、今の私たちがいます。原子爆弾や戦争の恐ろしい事実や悲しい体験を、一人でも多くの人たちに「伝えること」は、私たちの使命です。私たちは、あの日苦しんでいた人々を助けることはできませんが、未来の人々を助けることはできるのです。

私たちは、「ヒロシマを「遠い昔の話」にはしません。「戦争をやめよう、核兵器を捨てよう」と訴え続けていきます。そして、世界中の人々の心を「平和の灯火(ともしび)」でつなぐことを誓います。

二〇〇七年八月六日

広島市立五日市観音西小学校 六年 森 展哉
広島市立東浄小学校 六年 山崎 菜緒
六日、広島市平和記念式典で子ども代表が読み上げた「平和の誓い」

死

峠 三吉

泣き叫ぶ耳の奥の
音もなく膨れあがり
とびかかってくる
烈しい異常さの空間
たち罩めた塵煙の
きなくさいはためきの間を
走り狂う影

あ
にげら
れる
はね起きる腰から
崩れ散る煉瓦屑の
からだか
燃えている
背中から突き倒した
熱風が
袖で肩で
火になって
煙のなかにつかむ
水槽のコンクリー角
水の中に
もう頭
水をかける衣服が
焦げ散って
ない

電線材木釘硝子片
波打つ瓦の壁
爪が燃え
踵がとれ
せなかに貼りついた鉛の溶銀
う・う・う・う
すでに火
くろく
電柱も壁土も
われた頭に噴きこむ
火と煙
の渦

ヒロちゃん ヒロちゃん
抑える乳が
あ 血綿の穴
倒れたまま

「おまえおまえおまえはどこから現れたか」と手をつなぎ盆踊りのぐるぐる廻りをつづける裸のむすめたちつまづき仆れる環の瓦の下からまたも肩

髪のない老婆の熱気にあぶり出されのたうつ痲高いさげもつゆれる炎の道はた

唇までめくれたあかい肉塊たち足首をつかむずるりと剥けた手ころがった眼で叫ぶ

白く煮えた首手で踏んだ毛髪、脳漿むしこめる煙、ぶつつかる火の風はじける火の粉の闇で金いろの子供の瞳燃える体灼ける咽喉どつと崩折れて腕めりこんで肩

おお もうすすめぬ暗いひとりの底こめかみの轟音が急に遠のきああどうしたこと

どうしてわたしは道ばたのこんなところでおまえからものはなし、死なねばならぬ

峠 三吉詩集 「にげんをかえせ」より